論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	甲　第　1209　号	氏　　名	山　鹿　隆　義
論 文 審 査 担 当 者	主　　査　　伊　藤　研　一 副　　査　　髙　橋　淳　・　増　木　静　江		

（論文審査の結果の要旨）

がん治療の改善により、進行がん患者の生存期間が延長している。その様な背景の中で終末期となっても進行がん患者の健康関連 QoL（HRQoL）を維持・向上する支援が求められている。近年、がん患者の身体活動（PA）が ADL や HRQoL の改善に有効であるとされているが、外来患者を対象とした欧米での研究結果であり、入院中の進行がん患者の PA と HRQoL の関係は明確となっていない。本研究は本邦における入院中の進行がん患者における PA と HRQoL の関係を明らかにするために実施した。

信州大学医学部附属病院に入院中の進行した悪性腫瘍および/または転移性悪性腫瘍の患者を対象とした。PA は一軸加速度計を使用し一週間測定した。QOL はがん疾患特異的 QOL 尺度である European Organization for Research and Treatment of Cancer（EORTC QLQ-C30）で評価した。基本的動作能力は Revised Version of the Ability for Basic Movement Scale (ABMS)、日常生活動作能力は Functional Independence Measure の運動項目 （m-FIM）で評価をした。がん関連症状の評価は、Edmonton Symptom Assessment System Revised (ESAS) を用いた。統計学的解析は、軽度以上の負荷の PA が週 150 分以上群と週 150 分未満群の 2 群に分類し、２群間で測定項目を比較した。また PA に影響する因子を調査するためロジスティック回帰分析を実施した。本研究の最終的な解析対象は週 150 分以上群が 43 名、週 150 分未満群が 52 名の合計 95 名であった。

その結果、山鹿隆義は次のような結論を得た。

1. 本研究の対象者のほとんどが欧米のがんの身体活動ガイドラインで推奨されている中等度の負荷の基準値以上の PA には至っていなかった。
2. 軽度以上の負荷の PA が週 150 分以上群は、週 150 分未満群と比較し、EORTC QLQ-C30 の全体的な健康状態、身体機能、役割機能、感情機能、および社会機能が統計学的に有意に高かった。
3. ABMS、m-FIM も PA が週 150 分以上群で統計学的に有意に高かった。
4. PA に影響する因子は、ABMS がもっとも有力な因子として挙げられた。

これらの結果より、入院中の進行がん患者は欧米のがんの身体活動ガイドラインの推奨値の PA を得ることは困難であったが、軽度以上の負荷の PA でも QOL に関係することが明らかとなった。進行がん患者では、歩行のような軽度以上の負荷の PA を週 150 分以上実施することが HRQoL に有効である可能性を示された。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。